

Sky Seminar

関西学院大学 スカイセミナー

学内での講義内容を分かりやすくアレンジしたものです。

ヒューマン・エコロジー
人間生態学



ワオキツネサル

リンゴの実はなぜ赤い？ 自然と人との共生を考える

関西学院大学総合政策学部は一九九五年、兵庫県三田市の新キャンパスに創設された。「総合政策」とはどんな学問分野なのだろう。私の専門は生態学と人類学で、実際の研究対象はチンパンジーやワオキツネサルである。その私がこの学部で教えている理由は、総合政策のベースがヒューマン・エコロジー（人間生態学）だからだ。人は、自らが自然環境に占めるべき立場を探らなければいけない。これがヒューマン・エコロジーの基本姿勢である。

講義で例に出すのは「リンゴの実はなぜ赤い」という、発明王エジソンが小学生時代に発した問いである。答えは、いくつものレベ

ルがある。まず「リンゴの表皮に赤い色素が含まれるから」という答えはいかにもたわいがない。次のレベルは、「このメカニズムはどうやって発現するのか」という視点に対して、「遺伝子に実を赤くする働きがプロゲラムされ、実が熟するとそれが働くから」という発生学・形質発現学からの答えがある。それでは「赤い実」にはどんな良いことがあるのか。サルを観察していると、彼らはリンゴの果肉を食べながら、消化できない種を糞として撒き散らしていることがわかる。この種が、やがて新しいリンゴの木に育つ。つまり、リンゴの木は果肉をお駄賃に、サルに

「種子散布」してもらったのだ。たいていの哺乳類は色盲だが、サルは（人と同様に）色を感じる。言うまでもなく、赤いリンゴが発する「熟れたからもう食べてもいいよ」というメッセージをキャッチするためだ。これは、最近よく耳にする「共生」にほかならない。

もちろん、人はさらに進歩している。リンゴとの間で「栽培してあげるから、もつと大きく、美味しい実をつけてくれ」と約束したのだ。これが農業の基本であり、牛や豚等でも同じことだ。人は作物や家畜との共生なしには生存できない存在なのである。

ほかに、サルを見ていると色々な考えが浮かんでくる。たとえばチンパンジーの雌は六年に一回しか出産しない。雄は子育てを手伝わない上に、成長に時間がかかると授乳期間は五年ほどに及ぶ。この間、卵卵がストップするため、次の子が生まれえない。生涯で産める子供は五頭ほどで、次世代を残すのにも容易ではない。一方、人間の女性は理想的な状態では一生に十〜十五人産める。「家族」ができ、母親以外の者も子供を世話するようになったためだろう。もつとも、現代の日本社会の女性はそんな潜在的能力をむしろ抑えがちで、少子化による人口減少がささやかれている。社会政策的課題であるが、それもまたヒューマン・エコロジーの一分野（人口学）である。

総合政策はこのように多様である。意見交換のため学生・院生の研究発表の場として「リサーチ・フェア」を毎年開催している。内容は、ホームページ（<http://www.ksc.kwansei.ac.jp/researchfair>）をうろくたいたい。



高畑 由起夫
(たかはたゆきお)

関西学院大学総合政策学部教授
担当科目は自然環境論、エネルギーと地球環境等
1953年生まれ。
京都大学大学院を修了し、京都大学理学部講師、鳴門教育大学助教授、
関西学院大学総合政策学部助教授を経て、99年から現職。
編著書に「性の人類学」
「ニホンザルの自然社会—エコミュージアムとしての屋久島」などがある。